



苦いコーヒーの味

## 第一章

---

真面目という言葉は私は好きじゃない。ただ両親が私には塾に行かせ、勉強だ勉強だなど耳にタコが出来るほど言われる。学校は進学校で県でも上位の学校だ。しかも、両親の希望でお嬢様学校に通う事になった。男性がいると勉強に集中しないだの、悪い道に行くだの共学には通わせて貰えなかった。

今時、そんな理由でお嬢様学校に行くなんてうちの家くらいでは無いだろうか？

私の家は父が海外で仕事をしていて母もファッションデザイナーをしている。俗に言うお金持ちというやつだ。

父も伯父も母の伯父もお金持ちでお金持ち一家。私もその一家の子供なのでお嬢様という事になる。

そんなお金持ちという言葉も私は嫌いだ。お金持ちというだけで周りの大人は優しくしてくれるけど、私は普通に接して欲しい。塾の先生も私だけ優しくしてくれて他の塾の子からも嫌な目で見られてる。学校でも友達と呼べる子は一人くらいしかいない。塾終わったらまっすぐ家に帰る生活だったのがあるカフェとの出会いによって私の人生は変わった。

「やっぱり苦い」

「それが大人の味というやつさ」

幸次さんはフッと鼻を鳴らしながら言った

「変なの大人ってこんな苦い飲み物を好んで飲むなんて」

「いつか亜美ちゃんも解るよ」

ここのコーヒーは普通より苦い。店長の好みみたいだが本当に苦い。でも、優しい味がする。私をお嬢様と見ない。

普通の子として見てくれる。いや、むしろ子供扱いをしてくる。

「何で大人はこんな苦い飲み物好んで飲むの？」

「コーヒーというのは落ち着かせる効果があるんだよ。それと僕は人を幸せにする力があると思う。」

長い間、人に愛された飲み物というのは時代を感じさせるんだ。僕も飲んでるし、親父も飲んで、伯父も飲んで

それぞれの思い出というのが蘇るよね」

「へ～～」

彼はコーヒーという飲み物に相当な思い出があるみたいだ。どんな思い出？と私が聞くと彼は答えようとしない。

なので私は一回だけ聞いただけでそれ以降は聞かないようにしている。

そこにカランカランっとドアを開く音がする。

「よ！相変わらずガラガラだな」

「本当だなあ」

二人は笑いながら入ってきた

「うるせえ」

いつもの常連の2人が来た。お二人の名前は健さんと達也さん。店長の友達で古い付き合いみたいだ。

この二人は店長同様、私をお嬢様扱いしない。そして同じように子供扱いをする。

「亜美ちゃん、よくこんな不味いコーヒー飲んでられるね」

「お前にはコーヒー出さない」

「嘘嘘。悪いって。いつものコーヒーで頼むわあ」

二人でいつもの漫才みたいなやりとりが私には非常に面白い。

「はいよ、コーヒー1000円」

「そんな高いコーヒーだから客来ないだよ」

私はゲラゲラと笑ってしまった

「亜美ちゃんはいつも楽しそうだね。そんなに楽しい？」

「う～ん、家にいるより楽しい。家にいるとまた勉強だ勉強だって楽しい時間が無いんだもん。一日の中で一番楽しいかも」

「そんな生活楽しくないだろうね～。俺なんか学生の時は勉強なんかしてなかったし、むしろ喧嘩ばかりして怒られてたなあ。」

と健さんが言うと

「お前は悪いというか馬鹿だったんだよ」

幸次さんが笑いながら言う

私は本当にここが楽しい。学校だ、塾だ、家だ。っと私には癒しという空間が無かった。

癒しだと言ったら簡単な言葉だが人生の中でも楽しい時間に入る。まだ私の人生なんて17年しかたっていないので

人生の中でもという言葉を使うのが早いかも知れないが、私はその言葉が適切だと思う。

「こんなカフェで良かったらいつでもおいでよ」

「そうそう、楽しくするのが一番！」

「うんうん！」

3人は私を元気にさせてくれる。

そんな彼らがいるカフェの名前は「Freedom」

◆

俺の名前は幸次。カフェ「Freedom」というカフェを営んでいる。何でFreedomという名前にしたかと言うと誰でも仲良く気楽に来てほしい。楽しんでほしい。という気持ちを込めてFreedomという名前にした。しかし、大通りから外れている為か常連のお客さんか、偶に路地に迷い込んだ人が入ってくるくらいだ。

営業時間が夜の7時～26時までになっている。それは仕事で疲れた方が癒したい為にこの時間になっている。

おかげで夜遅くなると、サラリーマンやキャスト・ホスト・ヤクザ。色々なお客さんが来てくれる。

そんなカフェに亜美ちゃんが来た時は驚いた。7時くらいはお客さんが来ないのでいつも健と達也だけなのだがその日だけは違っていた。扉が開いたらお嬢様学校の制服を着た女の子が立っていたのだ。

「いらっしゃいませ」

「あの～良いですか？」

「どうぞ」

女の子は挙動不審で席に座った。俺が見てきたお客さんとは違ってこんな若いお客さんが来たのはお店を開けてこの3年の間で初めての事だ。背がちっちゃくて髪が長く。どこか上品な感じがする。お嬢様学校だから当たり前といったらそれで終わりだが、他のお嬢様とは少し違う雰囲気をしている。

「何にしますか？」

「ええっと・・・初めてで・・・」

「じゃ、私がお勧めするコーヒーをお出ししますね」

俺が薦めるコーヒーとは普通より豆を多くして濃い味をだしている。濃い味なのは俺の好みだ。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

彼女は飲んで渋い顔をして余り飲まなかった。

「何でこのカフェに来たの？」

「えっと・・・塾が近くで探検がてらに路地に入ったら良い匂いがして入ってみたんです」

「その制服、あのお嬢様学校のよね？じゃ～お嬢様なんだ」

「え？あ、そうです」

彼女の表情が少し変わった。どうやらお嬢様と言われるのは好きじゃないみたいだ。そうすると健が

「このこのコーヒー不味いだろ？最初は皆、それくらいしか飲まないんだよな」

「じゃ～お前は一生飲むな」

「冗談だろ～」

健は本当に冗談好きなやつだ。冗談というより俺に喧嘩を売ってるだけなのか？と思う時があるがそこは

昔からの仲なので冗談で済んでいるのだろう。

「健、そんな事言ったらこの子が一生来なくなったらどうするんだ？女の子が困ってるじゃないか」

「悪い悪い。ここは楽しい所だからゆっくりして行ってよ」

達也はフォロー役に近い。俺達3人の中で一番落ち着いているかも知れない。

達也も高校からの知り合いで俺達3人は仲良しだ。俺がカフェを営業したいと言った時もこの2人は応援してくれた。

友達というより親友という言葉の方が合うかも知れない。

俺達3人が楽しく話していると女の子も楽しそう笑っている。俺達は何気ない会話をしているだけなのに

女の子は楽しそうにしている。不思議な子だった。

その日はそんなに話さないで帰ったが、また次の日も来てくれたのはビックリした。

彼女は俺達の会話を聞いていて癒しになるらしい。俺からしたらそんな事で癒しになると言われて

嬉しい事だ。

そんな彼女が常連になって早い事3カ月。

彼女もいつしか俺達の仲間になっていた。そんな異色なメンバーが集まるカフェの名前は

「Freedom」

◆

私はあのカフェに通うようになってから周りから変わったと言われるようになった。自分でもそう思う。何が一番大きく変わったかという笑顔が多くなった。心から笑うというそんな事が今

まで私は出来なかった。先生・同級生・親にまで愛想笑いをして今まで過ごしていたというのがあのカフェに通うようになって解った。

学校に行っている塾に行っている早くあのカフェに行きたいという気持ちでいっぱいだった。

そんな事を考えてボーとしていると誰かが名前を呼んでいる

「亜美ってば」

「も～何回も名前を呼んでも返事しないんだもん。どうしたのよ」

「ご・・ごめん」

香は呆れた顔をして立っていた

「どうしたの」

「どうしたのじゃないよ。来週からテストだから一緒に勉強しようねって言ってたでしょ」

「あ、そうだったね。ゴメンね」

香は学校で優一の友達だ。こんな私でも普通に接してくれ周りの子と同じだという事を解ってくれる。

香もお嬢様なのだがお嬢様という印象は無く、ボーイッシュな感じが少しある。背はすらっとして髪はショートで

本当に綺麗な子だなと思う。そんな彼女は学年でも人気があって誰にも話しかけてくれて友達も沢山いるだろうに、私によく話しかけてくれる。なんというかちょっと変わった子だなって思ったりしてる。

そんな事を考えたりしていると香は心配した顔で私の顔を覗き込んで

「最近、ボーとしてる事が多いね。どうしたの」

「なんでもないよ」

塾終わりに路地にあるカフェに行ってるなど言ったらビックリするからやめておこう

うちの学校は進学校という事もあり校則が厳しい。スカートの長さ。リボンの長さまで決められている。

そんな厳しい学校で、夜にカフェに行っていて遊んでいると解ったら何て言われるだろうか。

学校より両親に怒られる事は間違いないだろう。

「テストってやだよねえ。学力でその人の何が解るっていうのよ。亜美は良いよね～。テストも

首位でさ」

「私はそれなりに勉強してるからよ。」

香は深いため息をついて私を見た。香も優秀なのだが勉強がとても嫌いでやはり親が勉強しろというので嫌嫌してるだけみたいだ。そんな彼女を見ていると自分を見ているみたいで親近感が沸いたのだ。

彼女も自分と同じでこんな生活に嫌気がさしてる一人だと私は思っている。

この教室を見て、他の生徒も上品に過ごしているのに嫌気がさしているに違いないが皆には一歩踏み出す勇気が無いのだ。彼女達にとって親の言う事は絶対なのだ。しかし、私は違う。ちょっと良い家系に生まれたからといって上品に過ごし、勉強し、普通に遊べない生活なんて嫌なのだ。

早くあのカフェに行きたい。そう思う毎日を過ごしていた。

◆

亜美と話すようになったのは本当に些細な事だ。たまたま席が隣になったので話しかけてたら私の思っていたイメージとは全然違うかったのだ。亜美は学年で上位をキープしていていつも一人なのでクラスや学年でも亜美の事を知らない人はいないくらいだ。私もそんな彼女のイメージは皆が思っているイメージだと思っていたのだが、話してみると楽しい子で何というか他の子とは違う気がする。

最近では、亜美の笑顔を見ることが本当に多くなった。前までも笑顔で話していたが今までは違い本当に楽しそうな顔をする時がある。私はそんな彼女の笑顔が好きだ。

「亜美、テスト勉強はいつするのさ」

「今回のテストはそんなに難しい範囲でも無い気がするんだよね」

「は～。そんな言葉、他の人が聞いたら怒られるぞ」

「そんな事ないわよ。ちゃんと勉強してたら出来るわ」

そんな事言われたら他の子じゃなくても私が泣けてくる。いつもテスト前には亜美と一緒にテスト勉強をする。

亜美が教えてくれる所はテストに出てくるのだ。これが不思議な事に。亜美がいうには先生の性格を理解していればどの問題を出してくるのか解るらしい。まったく恐れいります。でも、解らない問題は解らないので私は勉強をしない。

亜美も一生懸命教えてくれるのだが、難しい問題は解ける気がしないのだ。

私も成績は良い方だが、亜美に勉強を教えてもらってからは優秀という生徒の仲間入りしたわけだ。

そんな事で今回もテスト勉強をする為に放課後の図書室に二人で行く。

うちの図書館は県でも屈指の本の多さで貴重な本も数多くあるみたいだ。調べ物をする時は広過ぎて困る。

では、何故、ここで勉強するのかと言うと図書館が静かで学校で勉強しているという事にすれば家に帰る時間を遅らせる事が出来るからだ。

私も正直、家にいても心地よくない一人だ。うちの両親は勉強などは何も言ってこないし干渉はしないのだが、

窮屈に感じる時がある。私は塾など通ってはいないので亜美とこうやってテスト勉強をする時だけ家に帰るのが遅くなって嬉しいのだ。

亜美はテスト前というのはどうやら塾には行かないらしく、自分で勉強するという事は両親に許可を貰ったらしい。

なので、二人で勉強しながら話すのがあたし達のテスト勉強というものだ。

一通り勉強した後は二人の会話になる。学校の話だとか、家の話だとか亜美だからこそ話せるかも知れない。

話しているといつの間にかこんなにも仲良くなったんだなと思う。

いつの間にか私の中で亜美は親友に近い存在になっていたかも知れない。

勉強をしながら話していると周りが暗くなり時刻は午後7時になっていた。

周りは暗く学校にも残っているのはごくわずかな人だけだった。

「ね、香」

「うん？どうしたの？」

「今から30分くらい付き合ってくれない？」

亜美からどこかに行こうというのは珍しく私は驚いた。

亜美から誘ってくるって事が今までに無かったからだ。私から誘ってお茶などはしたことはあるけど、亜美から誘って

遊ぶという事を予想にできなかったのだ。私は驚いた反面、嬉しいという気持ちの方が大きかった。

しかし、こんな時間から何処に行くのだろうか？うちの学校は校則が厳しくこんな時間に遊んでいるのが学校側にばれたら注意どころか反省文を書いて親にまで何言われるか解ったもんじゃない。うちの親はともかく、亜美の親は怒るのは間違いない。

「ね？良い？」

「うん、良いよ」

亜美は凄く嬉しそうな顔をして帰る用意をしだした。こんなにも何かワクワクした表情を見たのは初めてかも知れない。



学校から帰って亜美に付いて行っていると亜美は話だした。

「私ね、真面目とか優秀とかレッテル貼られているのは嫌なの。だから、自分から何かしなきゃと思った時にあるカフェに出会ったの。そのカフェは私が落ち込んでようが悲しんでいようが楽しくさせてくれるの。そんな楽しい所、私だけじゃなく香にも知って欲しいの」

亜美はまるで秘密基地に向かうかのようににはしゃいでいた。

「でも、意外だな～。亜美がそういう所に行くなんて。そんな楽しそうな表情なんて余り見たことないよ」

「今まで何か楽しいって思えた事が余り無いのよ。学校では香と話したり勉強したりお茶したりするのは凄く楽しい。

でも学校が終わると塾に行ってその後は家に帰るだけでしょ？それがそのカフェに行くようになったら外の世界まで変わっちゃって！私の知らない事ばかりで凄く楽しいの」

そんな嬉しそうな亜美の顔を見てると私まで楽しくなる。

話しながら歩いていると亜美は大通りから外れて路地の方へ入って行ってしまった。

そこはBarなどがあり、大人の雰囲気がある半面、少し怖い雰囲気でもあった。

亜美は立ち止りあるお店を指で指した

「あれよ」

レトロな作りでそして落ち着く雰囲気があるお店。少しライトが暗い看板にはこう書かれていた

「C a f e F r e e d a m」っと。私は亜美に付いて行きそのお店に入る事にした。

そして、亜美と同様に私もこのお店と出会う事で世界が変わろうとしていた。

## 第二章

---

◆

香と話していると自分と同じだと本当によく思う事が多い。そんな彼女をカフェに連れて行こうと思ったのは自分と同じではないかと思ったからだ。香は親が厳しいわけでもなく同じ学校に通ってるけどお嬢様という雰囲気ではなく普通の子に近い。そんな彼女だがどこか今の生活に不満を持ってそんな風に思ったのだ。

香は少し不安な顔をしていたがお店に入ってその不安が無くなっていくのが解った。

「亜美ちゃん、こんばんは」

「こんばんは、今日は友達連れてきたの」

幸次さんは少し驚いた表情をした。ただでさえ、このお店に私みたいな制服着て来る子なんていないのに、同じお嬢様学校のしかも、私が友達を連れてきたのだから驚いても不思議ではない。

「亜美が友達を連れてくるなんて初めてだなあ。学校では仲良い子一人だけだと言っていたけどその子がそうなの？」

「そうよ」

私はいつもの席に座りコーヒーを頼んだ

「香ちゃんも座ってね」

香はお店を見渡して

「凄く素敵なお店」

とボソっとつぶやいた。香ちゃんも気に入ってくれたみたいで私は凄く嬉しかった

「ありがとうね、そう言ってくれると嬉しいよ」

幸次さんも何だか嬉しそうだ

「じゃ、今日のコーヒーは新しいお客さんの為に俺からのプレゼントだ」

っといつものようにコーヒーを作ってくれた。

「素敵なお店ね、亜美ちゃんもっと早く教えてくれたら良かったのに。亜美ちゃんが最近楽しそうなのはここに通っているからね」

「そうなの。でも、この時間からオープンするから夜遊んでいる事になるじゃない？話して香に心配されると思って」

夜遅くにこういう所で遊んでいると言ったら何て言われるか不安だった。心配するかも知れないと思ったのだ。

でも、香ちゃんはそんな心配は無用だったみたいだ。彼女は凄く気に入ってくれたみたいで良かった。少し挙動不審だけど私も最初はこんなのだったのかなって考えると少し笑ってしまいそうになる。

「はい、コーヒーね」

幸次さんがコーヒーを出してくれた。

「苦・・・」

二人揃って言葉に出してしまった

「まだ慣れないのかぁ」

「幸次さんのコーヒーが凄く特別に苦いからだよ」

香も苦いという表情のまま固まっていた。

「何で幸次さんのコーヒーはこんなに苦いの？」と香が幸次さんに尋ねた。

私はしまった！と心の中で思った。幸次さんは最初、私も同じ事を聞いて嫌な顔をしてた。それを香に言うの忘れていたと思った。

「亜美ちゃんも最初来た時に同じ事聞いたね。やっぱ友達だね。聞きたい？」

私達が聞きたいと尋ねると幸次さんはもう一杯コーヒーを作り始めた。私達がそれを見ていると幸次さんがコーヒーを作りながら語ってくれた。

「あれは俺が高校の時に」

私も香もその話を聞いてあの苦いコーヒーの味が優しい味なんだなと気付くようになった。

◆

高校生の時というのは非常に退屈だと俺は思ってた。健と同様にどうしようも無い悪だったし学校という場所が嫌いだった。行けば先生に怒られ、そして謹慎になり。親に怒られる。そんな日常が嫌で仕方がなかった。

そんな俺が変わったのは大した事じゃない「恋」だった。

そんな相手は美香。美香は本当に普通の子だ。いや、普通の子とは違いかも知れない。

俺や健を怖がらない。

美香と最初に知り合ったのは校舎裏だ。俺と健は体育が面倒で校舎裏でサボっているとボールが飛んできた。

ボールと共に甘い香りがし、俺達とは無縁の女の子だった。

「ごめんなさい」

美香はボールだけ取って走って行った。その時は何とも思わなかったがある日の帰り道、美香とまた会う事になった。

帰っていると美香が自転車を押して帰っていた。

「どうしたんだ？」

美香はこっちを見て少しビックリしたような感じだったが

「チェーンが切れてしまったの」

こっから駅まで結構、時間がかかる。高校から駅まで30分はかかる。今の地点だと歩いて30分以上かかると思う。自転車を押して帰るといのは大変な事だ。

「俺が押すからお前は俺の自転車に乗れ。俺は自転車押しながら走るから」

「え、悪いよ」

「俺はこう見えて鍛えてるんだ」

俺が押して走ると美香も付いてきた。それにしても歩いて30分以上かかる距離を走るの正直キツイ。

少し坂があったりするので走っていると坂が凄く長く感じる。走ると駅まで15分くらいで着いた。もう自転車押して走る事なんてしない。そう心に決めた。

「ありがとう」

美香がジュース片手に走ってきた。

「ありがとう」

渡されたのがコーラだったのが気になるが喉が渴いてたので嬉しい。

電車が来たのだが乗れる元気ではなかったのも乗らなかったが、元気になるまで美香と話してる事にした。

話していると本当に普通の子だと感じる。小さくて可愛く、色が白く、何だかほっとけない感じがする。

「お前は俺が怖くないのか？普通のやつだと逃げるぞ」

「何で？怖いと思った事ないもの」

自分でいうのもなんだが自分を見て怖がるやつはいっぱい見たが怖がらないで接してくるやつなんて、そんなになかった。なので美香みたいな女の子というのは珍しく、こんなに話す事も無かった。

なので俺の中では新鮮で何か安心感みたいなのがあった。

「幸次君って優しいよね。私がチェーン切れて歩いてたら助けてくれたし」

「そんな小さい体で自転車なんか押してると駅に着くのがいつになるか解らないからな」

美香はムツとした顔をしたがその表情も何か可愛かった。

電車が何本も過ぎるくらい二人は話してた。時間を忘れるくらい。帰る頃にはすっかり日が落ちて

夜になっていた。

「こんな遅くまで悪いな。気をつけて帰れよ」

「うん、また学校でね」

「おう」

また学校でね。そんな言葉が俺の中で凄く嬉しく感じた。今まで学校が凄くめんどくさく、嫌な場所がその時からか楽みな場所が変わろうとしていた。

これが美香との出会いであり、俺が美香に恋した瞬間でもあった。

## 第2章-2

---

美香との出会いがあってから俺の学校生活は変わったかもしれない。美香と話す事が学校に行く理由になり

学校も悪くないなという感じがあった。健や達也も少しは学校に来るようになった。

いつの間にか俺達3人の中に美香も入るようになった。悪い意味じゃなく4人で話すようになったという事だ。

美香との友達と話すようになっていって楽しい学校生活になっていった。

学校が楽しいと思う事が自体が俺にとって不思議な感じだった。学校という場所は楽しくもないのに行って、先生の'有り難い'お話と聞く。そんな毎日だったのに美香と合う事によってそれも気にならなくなった。

こうやって不良というレッテルの貼られた俺が学校に来るようになったんだから先生達もビックリしたようだ。

特に俺の担任の高橋先生はビックリしていた。

<何で大人しくしてなかったんだ>

っと聞こえてるような顔をしていた。

この高橋先生はもう40を過ぎたベテランの先生だが、俺や建には相当悩んでいたようだ。

俺はこの高橋先生には何も恨みなどは無いが、時々俺や建の顔色を伺ってるのを見ると嫌気がさす。

大の大人が子供に気を使うなっと言いたい。俺はなぜ不良という道に進んだのか?と考えた事がある。

普通の道に進んでいたなら良い成績を取って良い人生を送れていたかも知れない。でも、俺はそんなのは嫌だ。

将来自分の為に勉強をするのかも知れない。しかし勉強をして良い会社に入っても、この高校生活というのは戻らないのだ。

そう思うと俺は'今'という時を楽しみたいと思った。しかし、子供が'今'を楽しもうとすると大人というのは邪魔をする。

子供が前に進みたいと思っても道を塞いで自分たちが作った道を通らせようとする。その大人たちが作ってくれた道というのは正しい道かも知れない、しかし俺はそんな道よりも大人たちが塞いだ道をぶっ壊して進んでいきたいと思った。それが理解されないと'不良'と呼ばれるのだろう。

そんな事を考えてると高橋先生が傍に来た。

「幸次君、最近よく学校に来るようになったね、先生は嬉しいよ」

「・・・・・・・・」

俺はスルーした、先生は話続けてくる

「君や建君が学校に来だして先生たちも驚いてたよ。こうやって真面目に学校来てくれると先生達も一安心だよ」

「俺たちは何もしないのでご安心を」

「ははは・・・」

先生はオドオドしながらどこかに行ってしまった。ああいう態度が嫌いなのだ。ああいうのを見ると気分が悪くなってしまう。今日は早退しようかなと思った時に美香が来た

「ああ～何か不機嫌そうな顔。どうしたの？」

「いや、何でもね～よ」

「うそだ～。何かありました。って顔に書いてあるよ」

うっと思いつながら何かようか？と尋ねると美香が帰りに遊びに行こうという話だった。

「えっとね、帰りに美味しいパフェがある所があるんだ～一緒に行こうよ」

「パフェってなあ。そんなの女友達と一緒にいけよなあ。」

「あ～誘ってあげてるのに。そんな事言うともう誘わない～」

はいはい、行きますよ。と言いながら美香は笑顔を見せ素直でよろしい。と言い教室を後にした。

あの笑顔を見ると本当に可愛いと思う。その為に学校に来てるのかも知れないと最近思うようになった。

しかし、学校で建や達也と遊ぶとまた新鮮さがある。外で遊ぶのとは違い'学生'という気分で遊べるので

中々それはそれで楽しいもんだ。

学校・・・自分の中で嫌な物が好きになるというのは何か不思議を感じる。こうも簡単に嫌な物が好きに変わる事ができるのか？もしかして自分は最初から学校という場所を好きだったのではないのか？そう感じる事も多くなった。

その日の授業は終わり、美香と一緒に遊ぶ約束をしていた俺は美香と合流する事にした。

授業が終わり、なかなか来ない美香を待っていると遠くから走ってくる美香の姿がみえた

「ごめんね、日直で遅くなっちゃった」

「待った代わりにパフェ奢れよな」

「え～。やだよ～」

「ははは、嘘だ。行くぞ」

ぷーと膨れた美香の顔も可愛いなと思いつながら美香の行きたがっていたパフェ屋に向かう事にした。